

歴史探訪

クラブ

其の 183

History Inquiry Club



文化財課 ☎ 22-1720
(博物館) FAX 22-2028

見直そう、手ぬぐいの魅力

以前、知人から作業用にと、たくさん未使用の手ぬぐいをいただきました。家で使う機会もなく、しまわれていたのでしょうか。あらためて新品の手ぬぐいを確認してみました。手ぬぐいは、綿を平織りしたもので現在は幅33cm、長さ90cm程度の大きさです。民具事典などによると、「手拭は浴用、洗面、手拭きに使うものですが、被り物としてもよく使われる」とあります。素材の綿が大



●手ぬぐいを被っている作業中の女性たち

量に栽培される江戸時代から普及し、普段使いのほか、歌舞伎や落語などの芸能の小道具にも使われ、祝事の配り物でもありました。今でも住宅の上棟式で配られます。

戦前の渥美の人々の暮らしを記した『三州奥郡漁民風俗誌』では、わざわざ手ぬぐいの項が設けられ、「そこには、漁師はいつも手拭を持ち、女性はいつも手拭を被っている」と記されています。また、伊良湖の女性は被り用、腰に下げた手拭き用の「二筋の手拭」が粹な姿であるとしています。庶民にとって、いかに生活に密着した実用品だったばかりでなく、ちょっとしたこだわりのアイ

テムだったことが分かります。

手ぬぐいは薄くて軽くて丈夫、木の肌の触りも実に心地よく、吸湿性もあり、乾きやすく、コンパクトに畳めます。さらに染め抜いた柄を楽しめ、洗い込むとその風合いに味が出てきます。昔は、農作業だけが 아니라裂いて包帯代わりに、下駄の鼻緒代わりなど、アイデア一つで何にでも使えます。

さて、冒頭のいただいた手ぬぐいには259号線バイパス開通（昭和51年）・田原中部小学校の体育館の建設（昭和51年）記念をはじめ、地域のお祭り、町民体育祭、青年会・会社・店名、行政の啓発などの文字や柄が染められています。記録にならないもの、忘れ去られたものもあり、手ぬぐいから昔の出来事や、行事、街並みまで思い出されます。さらに博物館では渥美町の文化祭で配った町内の文化人の手による書、絵を染めたものも見つけました。手ぬぐいに地域の歴史文化の記憶が染められた大事な資料となった訳です。生活に寄り添った手ぬぐいがこのような価値を生むとは思いませんでした。現在、体拭き・汗拭きはタオルな



●記念の手ぬぐい

どが使われ、手ぬぐいを日常で使うことは少なくなりました。しかし、手ぬぐいの良さに注目した女性たちを中心に、伝統的な柄はもとより今風にデザインされ色彩豊かな柄に染め抜いたものが再び人気となっています。風呂敷のようにラッピングにも使うなど、新しいアイデアも生まれているようです。また、災害時にも活躍する手ぬぐいの携帯は必須で、その機能性の高さは折り紙付きです。手ぬぐいは、長い歴史の生活の知恵や工夫、遊びが詰まっている魔法の布です。

今回、手ぬぐいの魅力を見直しました。もちろん私も普段から愛用しています。皆さんも暮らしの中に取り入れてはいかがでしょうか。

(増山)